

# 安全目標と「社会」: 専門家判断と客観性

関西大学 菅原 慎悦

リスク部会シンポジウム

2019.11.09

# 近時の議論に対する疑問

- 安全目標(特にSurrogateである定量的目標値)を、「客観的」「科学的」判定基準として利用しようとする言説
  - 学術会議の議論:「安全と非安全の境界を決めなければならない」
  - 安全目標(特に大規模放出事故頻度)を人格権侵害の判断に際して参照値とすべきとの主張
  - PRAを実施し、安全目標をクリアしたプラントから再稼働させよとの主張 etc.
- 疑問
  - 「安全」の境界を外形的に画定するのが安全目標と考えて本当によいのか？ そのようなことが可能なのか？
  - 「安全」は「客観的」「科学的」に判定されるべきものなのか？ そこでいう「客観的」とはどのようなものか？
  - 「安全」の判断と、定量的リスク評価結果や定量的安全目標との関係は？
- 「安全」をめぐる(専門的・行政的)判断と「客観性」の関係性

# 潜在的な緊張関係

## 専門家判断



- 専門家個人の経験・知識・人格に基づき、主観的に判断を下す
- 専門家の知識・属性・人物等への信頼や敬意により支えられる
- 判断の恣意性に対する懸念が生じやすい

## 判断の没個人化

$$\Delta A = \left( \begin{array}{l} \frac{\partial^2 F}{\partial x^2}(A); \frac{\partial^2 f}{\partial x \partial y}(A) \\ \frac{\partial^2 F}{\partial y \partial x}(A); \frac{\partial F}{\partial y^2}(A) \end{array} \right)$$

- 個人の経験や技能に依存せず、誰がやっても同じ結果を得たい（≡「科学的」）
- 手続の定量化・規格化を志向
- 専門家の矜持との間で潜在的な緊張関係

# 信頼の危機と没個人化

- T.M.Porter, “Trust in Number”
  - 専門家判断に外部から強い疑念が生じると没個人化が進みやすい
  - 専門家への信頼や社会構造とも密接に関係
- 19世紀半ば: 英国の保険数理士
  - 数値や手続による客観性を志向せず、プロとしての専門性を擁護
  - 「紳士」としての専門家に対する信頼・敬意に依拠
- 19世紀半ば: フランス政府土木局
  - 技術官僚たちによる定量計算と広範な自由裁量
  - エコール・ポリテクニク卒という強固なエリート性に依拠
- 20世紀後半: 米国の陸軍土木技術者
  - 判断の恣意性をなるべく排除し、手続の標準化による客観性を志向
  - 費用便益分析の普及、定量的手順の厳密化と公開性

# 英国のALARPとBSL/BSO

- ALARPという抽象度の高い判断原理
  - リスク低減にかかる努力の程度や社会的関心事等を広範に考慮
  - ALARPであることを被規制者が自ら論証し、規制者が妥当性を判断
  - 公文書でも判断の主観性が強調される: “I am satisfied with...”
- 規制様式と社会的背景
  - Non-prescriptive, fit-for-the-purpose
  - Caseごとに諸事情を勘案して判断する英国法の土壌
  - (やや古いが)社会の階層性、「紳士」の伝統
- 透けて見える安全観
  - 数値のみから安全を判定するのは野暮で、合理性をその都度判断
  - 専門家・行政官としての判断を強調、そこにこそ明確な責任が生じる
  - その際に、あまりに極端なものは判断領域から除外しようという目安のラインがBSL/BSOと解釈可能

# 米国

- 手続の厳格な規格化・定量化を志向
  - 定量的リスク分析の高度な発達、費用便益分析の活用
  - 原賠法改正や反対運動等、外からの要求・圧力が一つの契機(Wellock, 2017)
- 規制様式と政治文化
  - Prescriptive, 細部にわたるルールメイキング, 問題が論争的であるほど手続の没個人化・規格化・定量化が進行
  - エリート主義的な専門家判断への依存よりも、オープンな民主主義を志向
  - 権力の分散と多元的民主主義: 様々な勢力が互いに主張・論争し合いながら物事を決してゆく
- 安全目標
  - 安全目標を定性的・定量的に設定、規制上の意思決定において頻繁に参照
  - 高度に規格化・定量化された方法論によって得られた結果を扱う際、ある種の手続を課すことで、専門家判断を統御するものと解せる

# 没個人化への単純な移行ではない

- 一見すると...
  - 決定論: 専門家個人の経験・知恵に大きく依存する
  - 確率論: 手続の没個人化・定量化・規格化を志向
  - Risk-informed regulationは専門家依存から没個人化への移行？
- 実際には...
  - 米国流RIDMは没個人化を目指しているように見えるが、その実、専門家判断の重要性を際立たせるもの(菅原, 2018)
    - PRA: 評価者たちの信念を統合・表現する体系化された手続とも解せる
    - 重要な規制上の意思決定は、NRC委員の投票による
  - 客観的分析は、定量的評価による相対比較のみに自らの役割を限定することで、かえって政治の領分を明確化する(Cf. 岡, 2004)
    - Regulatory Guide 1.174における安全目標の参照のされ方
  - 没個人化ではなく、専門家判断の次元を一段上げるもの

# 日本：没個人化をめぐる揺らぎ

- 没個人化を志向する規制委の言説
  - 規制委設立時の制度設計者たちの意図
    - “裁量を極力小さく”“裁量の幅の狭い行政を”
    - 専門知が不適切に歪められてきた、という事故からの学びが影響？
  - 規制委の実際の営みも没個人化・機械的客観性を志向
    - ミッションに対する自己認識：「科学的」への強い拘り
    - 安全目標：surrogateの技術的議論への局限
- 一方で、逆方向への社会的要請も垣間見える
  - 「安全とは言わない」言説へのネガティブな反応
    - 地元了解における議論：没個人化・規格化された手続から零れ落ちるものに対する、ローカルな反応の一部とも解しうるか
  - 恣意性を排除する努力は必要だが、責任を伴う専門家判断の完全な排除と意思決定の自動化までは望んでいないはず
    - Arendtの官僚制批判



# 結語

- 没個人化・手続の規格化による恣意性の排除のみならず、さらにその先にある、より高度な責任ある専門家判断の再構築が必要
- この要請に対して、主観の排除としての「科学」への逃避や、意思決定の自動化による機械的客観性への依存は、適切な解とはなりえない
- 科学・技術の専門知を適切に参照することや、定量的なリスク評価を使いこなすことと、判断を自動化することとは、同義ではない
- 安全目標をめぐる近時の議論で、専門家判断の側面よりもむしろ、恣意性排除と没個人化の側面のみが強調されがちなのは気懸かり
- 定量化・客観化の手続を一層整備すると同時に、主観的判断を不可避免的に伴う「安全」に正面から向き合うための賢慮のシステムが不可欠であり、安全目標の議論もこれを目指すべき
- 既刊報告書で提案した安全目標の姿は、上記のような意図に基づく(山口ほか, 2018)